

令和 5 年 4 月 20 日現在

機関番号：15501

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K19762

研究課題名(和文) ネグレクトのハイリスク家族支援における「保健師が介入するタイミング」に関する研究

研究課題名(英文) A Study on "The Timing of Intervention by Public Health Nurses" in Supporting High-Risk Families of Neglect

研究代表者

緒方 彩乃(木嶋彩乃)(Ogata-Kijima, Ayano)

山口大学・大学院医学系研究科・講師

研究者番号：70759670

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：子どもネグレクト対応を行う保健師の介入するタイミングには、様々な背景が複雑に関係しており、介入の意思決定の根拠に焦点を当てる必要性が示唆された。意思決定には、ケース要因の他に、外的要因、支援者である意思決定者や組織要因の存在があることが明らかとなった。児童虐待に関するアセスメントツールについて文献検討により支援者の状況や特徴を明確にできるアセスメントツールの必要性が示唆された。意思決定に係る支援者側の特性について、海外の文献から抽出・整理、インタビューにより、内容を修正・洗練し、保健師自身のスキルや価値観・態度、保健師が所属する職場、保健師が連携・協働する関係機関に関する内容に整理された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

虐待全体の約40%を占めるネグレクトは、健康問題や貧困など複合的要因により改善に時間を要し、介入の遅れも指摘されている。介入のタイミングを図る際には支援者側による意思決定があり、その意思決定には様々な要因があるが、本研究では未解明であった支援者側の特性について検討、整理された。ネグレクトは市町村での対応では最も多く、自治体保健師は日常の母子保健活動を通して児童虐待のハイリスク家庭を早期に発見し、予防的支援ができる立場にある。支援者について保健師に焦点をあてたことで、今後得られた研究成果について信頼性・妥当性を得ることができれば、早期予防・早期対応への貢献が期待できる。

研究成果の概要(英文)：The timing of when to intervene by health professionals who respond to child neglect is intricately related to a variety of backgrounds, suggesting the need to focus on the rationale for intervention decision-making. In addition to case factors, external, supportive decision-makers and organizational factors were found to play a role in decision-making. A literature review on assessment tools for child abuse suggested the need for assessment tools that can clarify the situation and characteristics of the supporters. The characteristics of the supporters' side regarding decision-making were extracted and organized from overseas literature, and the content was modified and refined through interviews, and organized into content related to public health nurses' own skills, values, and attitudes, the workplace to which they belong, and the related organizations with which they collaborate and work together.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：ネグレクト 児童虐待予防 保健師 タイミング 意思決定

## 1. 研究開始当初の背景

近年、児童虐待対応件数の増加、併せて多数の死亡事例も発生し、発生予防や重症化の対策が喫緊の課題である。中でも子どもネグレクトは生活困窮、精神疾患未治療、知的障害、障害児をもつ家族、DVのある家族、若年母親(小笹,2016)など健康問題や社会的不利な状況下など重複した要因により生じ、多様性・個別性への対応が求められる(弘中,2009)。またネグレクトは子どもの生命の危機を及ぼす上に、後に攻撃性の高さなど行動上の問題や、不登校など知的・認知的発達の問題など子どもへ様々な悪影響を及ぼす(安部,2016)。

ネグレクトは虐待の全体の4割以上を占め、市町村の対応では最も多く、自治体保健師は日常の母子保健活動を通して児童虐待のハイリスク家族を早期に発見し、予防的支援ができる立場にある(頭川,2006)。事例の多くを長期間継続して関わる中、保健師の9割が困難さを感じており、理由として「介入方法やタイミングの難しさ」が最も多い(有本,2018)。海外でも介入の意思決定の困難さや(Bhatti-Sinclair&Sunciffe,2013)、支援開始の判断や支援が一致しないという課題があり、近年支援者の個別性に焦点が当てられている(Shlonsky,2015)が、解決策は得られていない。アセスメント指標や支援方法が確立されてきたが、どの機会に行うのが最適かという「介入するタイミング」については未解明である。

## 2. 研究の目的

本研究では子どもネグレクトの対応にあたる保健師に着目し、保健師がどの機会が適切と認識・判断し、機会をどう作るかという「介入するタイミング」の図り方について明らかにする。

## 3. 研究の方法

### (1)海外の子どもネグレクト家庭への介入プログラムに関する文献検討

近年の海外におけるネグレクトに関する介入プログラムの傾向を明らかにする。pubmedを用いて、検索用語を「child」「neglect」「intervention」「program」、対象をHuman、検索フィールドをTitle/Abstract、検索年を2010年1月から2020年1月とした。原文内容から対象や方法、結果の読み取りが可能な介入研究で、子どもネグレクトについて言及しており、プログラムの評価検討を行っている論文を抽出した。対象文献について、研究デザイン、研究目的、対象、実施内容、評価指標等について抽出、要約表を作成し、比較検討を行った。

### (2)児童虐待に関するアセスメントツールに関する文献検討

児童虐待の早期発見・対応、発生時の迅速・的確な対応に向けた一助としてアセスメントツールがあり、介入の判断に用いられるツールである。リスク要因の重みづけや判断は支援者に任せ、初心者の適応の困難や、過去の経験と価値観に依拠した主観的な解釈による意思決定が課題とされているが(池田,2016)、アセスメントツールの活用により標準化や適正化への効果が期待できる。対象ケースのアセスメントだけでなく、組織的要因や支援者の個人要因などについても着目することも必要であるため、現在活用されている児童虐待に関するアセスメントツールが、支援者や組織など支援者側に着目しているかどうか明らかにするために、2021年度に、John D. Fluke(2015)の意思決定の枠組みである4領域と、児童虐待対応に関するアセスメントツールの関連について、文献検討を行った。そして、特徴や傾向を捉え、今後求められるアセスメントツールについて考察した。

対象文献は、データベースは医学中央雑誌を利用し、キーワードを(児童虐待 or ネグレクト and スクリーニング) or (児童虐待 or ネグレクト and アセスメント)、母子保健 and アセスメントとし、過去10年(2011年~2021年9月)の期間で原著論文に限定して検索した。重複文献を除外したところ44件となった。44件の中から、児童虐待に関係するアセスメント指標を開発・作成し信頼性や妥当性の検討をしている文献4件、有用性の検討4件を行っている文献を8件選定した。続いて「厚生労働省児童虐待に関する法令・指針等一覧」、「厚生労働省子ども・子育て支援推進調査事業」、「厚生労働科学研究成果データベース」から、過去10年に児童虐待対応に向けて作成されたマニュアルやガイドラインの中で、アセスメントツールが含まれる7つのマニュアルを選定した。8文献からアセスメントツールを10件選定した。7マニュアルからアセスメントツールを17件選定した。以上より分析対象のアセスメントツールは計27件となった。

### (3)文献検討とインタビュー調査を中心とした支援方針の意思決定要因にある「支援者側特性」について整理、検討

先行文献(海外)の文献検討を重ね、John D. Fluke(2015)の意思決定の背景の枠組みである4領域のうちケース要因を除く3領域を基準に、意思決定に関連あるいは可能性が示されている内容の文献で支援者個人や組織に関する内容の記述のある文献と書籍を選定し抽出した。

子どもネグレクト家庭へ支援経験のある保健師へのインタビューより、子どもネグレクト対応のケースへの関わりや対象者の認識や状況から、意思決定に関連がある内容を検討した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 海外の子どもネグレクト家庭への介入プログラムの特徴

子どもネグレクトの介入に関する文献は13件で、研究デザインは全て比較対照試験(ランダム化)であった。研究対象は児童虐待・ネグレクトのハイリスクの親、その子どもであった。選定基準は、薬物依存、若年、知的障害、貧困、栄養面や経済面のサービス利用者、児童保護サービス(CPS)の履歴等で複数組み合わせていた。リクルート方法は、CPS、各種サービス機関等からの紹介等であった。実施方法は家庭訪問が10件、学校や講義2件、グループワーク1件であった。家庭訪問は出生前からリスクのある家庭への予防的な介入(HFNY、NFP)、ハイリスクで子どもの安全や親の監視も含めたもの(SafeCare)があった。エビデンスが示されている SafeCare は対象を父、若年母に絞って検証していた。薬物依存の治療と子育ての両面に介入するもの(START、FAIR)や貧困で未婚の女性に対し経済的な独立を支援(Network RCT)も対象を限定していた。介入効果の評価指標は、親権の保持状況、通告状況、サービス利用状況、メンタルヘルス、育児態度、虐待リスク、中毒の深刻度、経済的困難、プログラムの満足度等、子どもは発達、行動等であった。介入期間が数年に及ぶもの、実施直後の評価でも対象が幼児のものは有意な効果が示されていた。介入プログラムの内容には様々な種類があり、研究対象のリスクを絞り評価検討をされる傾向があった。ネグレクトの背景には複合的なリスクがあり、対象にあわせた介入方法の検討・選択する必要性や、対象の変化に時間を要することが明らかになった。

##### (2) 児童虐待に関するアセスメントツールの特徴(支援者に着目する必要性)

分析対象のアセスメントツール27件について、使用目的、点数化、リスク判定、活用時期や活用場面の項目において類別・分析された。さらに、対象27件についてアセスメント項目の内容を意思決定フレームワークの4領域7分野において類別・分析された。

アセスメントツール27件の使用目的は次の4種類に分類された。「虐待リスクの早期発見」17件、「虐待の早期発見・対応」6件、「虐待の再発予防・家族再統合」1件、「要支援者の状況把握・対応」3件であった。「虐待リスクの早期発見」は虐待予防に向けたプレアセスメントで、虐待リスクのスクリーニングであった。「虐待の早期発見・対応」は虐待を見逃さず早期に対応できることを目的としておりリスクアセスメントである。「虐待の再発予防・家族再統合」は虐待を受け保護された児童が、施設入所等の措置を解除し家庭復帰の判断のために利用されるものであった。「要支援者の状況把握・対応」は、児童相談所による分離保護が必要ではないものの集中的な支援を要するケース、あるいは家庭復帰したケースへの在宅生活支援におけるモニタリングに用いられるものであった。

アセスメントツールの活用時期は、周産期は11件、乳幼児期は21件、学童期は10件であり(重複あり)、乳幼児期が最も多かった。活用場面をみると、特別な場面を指定せず、地域保健や医療のどの場面でも利用できるツールがほとんどであった。

意思決定フレームワークの領域に当てはめてみたところ、個々のケースの要因に該当する親の養育力は、全ツールの項目に含まれていた。そのうち外的要因も項目に含む構成となっていたツールは、項目の比重や内容の充実度は異なるものの「虐待リスクの早期発見」の育児や養育能力全般、～ など使用目的全体で該当していた。一方、組織的要因や支援者の要因の項目は、ほとんどのツールでは項目として含まれていなかった。

アセスメントに影響すると考えられる支援者や組織の現状や特徴を明確にできるアセスメントや、ニーズアセスメントにより必要とされた支援内容に対応可能かどうかといった視点のアセスメントができるツールの必要性が示唆された。

##### (3) 支援方針の意思決定要因の背景の一つである「支援者側特性」について

子どもネグレクトのハイリスク家族に対する支援経験のある保健師に、ハイリスク家族に対する支援の実際についてインタビューを行った結果、(1)の海外の介入プログラムの文献検討結果と同様に家族の状況や周囲の状況によって介入する頻度や方法等は異なっていた。ネグレクトを予防するためには保健師が家族に対し関わる頻度や方法等を適切に選択できることが重要であることが考えられた。介入するタイミングには、様々な背景が関係しており、判断の根拠を明らかにしていく必要性が示唆された。

文献検討とインタビューの結果、保健師の意思決定の背景として抽出された項目の内容は、保健師自身のスキルや価値観・態度、保健師が所属する職場、ネグレクト対応において保健師が連携・協働する関係機関に関する内容に整理された。内容の妥当性に関して保健師にインタビューにより意見を伺い、追加・修正を行い、内容を洗練させることができた。

#### <引用文献>

日本における児童虐待のアセスメントツールの特徴に関する文献レビュー, 熊本大学医学部保健学科紀要, 18, 46-54, 2022.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 木嶋彩乃, 大河内彩子	4. 巻 18
2. 論文標題 日本における児童虐待のアセスメントツールの特徴に関する文献レビュー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 熊本大学医学部保健学科紀要	6. 最初と最後の頁 46-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 木嶋彩乃, 大河内彩子, 藤村一美
2. 発表標題 子どもネグレクトに対する海外の介入プログラムに関する文献検討
3. 学会等名 日本地域看護学会第23回学術集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------